愛と日本語の惑乱

SHIMIZU YOSHINORI

清水義範

講談社文庫

講談社文庫

愛と日本語の惑乱

清水義範

講談社

|著者| 清水義範　1947年、愛知県名古屋市生まれ。愛知教育大学国語科卒業。'81年『昭和御前試合』で文壇デビュー後、'86年『蕎麦ときしめん』でパスティーシュ文学を確立し、'88年『国語入試問題必勝法』で第9回吉川英治文学新人賞を受賞。著書に『雑学のすすめ』（絵・西原理恵子）『いい奴じゃん』『考えすぎた人』『学校では教えてくれない日本文学史』『ifの幕末』『ドン・キホーテの末裔』など多数。

愛と日本語の惑乱
清水義範
© Yoshinori Shimizu 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年2月14日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
販売部（03）5395-5817
業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277759-9

プロローグ　7
第一章　放送用語委員会　13
第二章　バイバイ！　尻ぬぐい　39
第三章　東大出とビンボー症　65
第四章　〈もがな〉との対話　97
第五章　イライラのそのわけは　121
第六章　すべからくぱないよね　147

第七章　脳の中の文法　175
第八章　新しいお嫁さんが来て結婚です　201
第九章　しからずんば、花　227
エピローグ　255
解説　金水　敏　260

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

講談社文庫

愛と日本語の惑乱

清水義範

講談社

プロローグ　7
第一章　放送用語委員会　13
第二章　バイバイ！　尻ぬぐい　39
第三章　東大出とビンボー症　65
第四章　〈もがな〉との対話　97
第五章　イライラのそのわけは　121
第六章　すべからくぱないよね　147

第七章　脳の中の文法　175
第八章　新しいお嫁さんが来て結婚です　201
第九章　しからずんば、花　227
エピローグ　255
解説　金水　敏　260

愛と日本語の惑乱

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

プロローグ

途中から、自分は夢を見ているのだと気がついていた。そう考えるしかないような奇妙ななりゆきなので、眠りの中にありながらも脳の片隅が、これは違うこれは違うとシグナルを発信したのだ。

彼は大きな渦にのまれて、ゆっくりと流されていた。そんなに必死に泳いでいるわけでもないのに、胸から上は水面上にあってそれ以上は沈んでいかない。だからもがいたりせずに、ただ流されていた。巨大な渦は擂り鉢状になっていて、彼はその鉢の高さの真ん中あたりにいた。そうして、ゆっくりと回転しながら、少しずつ下方へ下がっていくのだ。

ふいに気がついた。と言うか、そういうふうに自分で決めたのかもしれない。この渦の中心まで行き、最下底に達したら、そこで水中へ大きな力で引きずり込まれる。そうなれば死をまぬがれることはできない。

この渦から抜けなければならない、と思って、全身に生温かい汗をかいた。心臓を誰かに直に握られているような不快感だった。

そこで、意識の奥のほうに、これは夢なんだな、という予感が生じたのだ。この種のいやな感じは夢に特有のもので、現実はこういうふうではないと、分析している部分が頭の中にあった。

なのに、不快感に苦しみながら、目を覚まそうとはしないのが不思議である。いやな夢の中にいて、半分くらい覚醒した意識でこれは夢だなと思っているのに、じゃあ起きてしまってこの夢を終らせようと、なぜしないのだろう。彼の意識がふわふわと狙いをつける方向は、これが夢だということはわかっているのだから、なんとか楽しい展開に持っていこう、ということだった。いやな流れだからもっといい方向へ持っていこう、と夢を操ろうとするのだ。なのに、思うようにはいかず夢はますます不快なものになっていく。つまりは、半分覚醒しているような気がするというのが錯覚で、そのように全体が夢の中にいるということなのだろう。

彼は、胸から下が浸っている水が重くなってきたように感じた。粘り気が強くなり、彼の体にまとわりつき締めつけてくる度合いが大きくなったような気がした。そして、渦が実は透明の液体ではないことに気がついた。海水か、それとも湖水かはわ

かっていなかったのだが、実はそのどちらでもないのだ。この渦は水ではない。だから冷たくなかったのだと納得。

渦は少し黒ずんで汚れていた。よく見て彼は、その渦が細い紙のテープでできていることを知った。幅五ミリほどの紙のテープが、何千本も集まって、渦のようにからみあいとぐろを巻いているのだ。

その白い紙に、小さな黒い斑点が一列に並んでいることに気がついた。すべてのテープに斑点があってびっしりと並んでいる。渦が少し黒ずんで見えるのはそのせいだった。

目をこらしてみて、と言うより正確には、夢の中なのだから意識をそこに向けてみて、彼は斑点が文字であることに気がついた。紙のテープにびっしりと文字が書かれているのだ。

ふいに彼は承知した。そこには言葉が並んでいるのだ。ありとあらゆる言葉が、テープに書き並べられ、ゆっくりと渦巻いている。これは言葉の渦なのだ。そういうものに、彼はのみ込まれているのだ。

夥(おびただ)しい言葉が視界一面をおおっていた。擂り鉢状の渦のなかほどの高さのところにいるのだから、目に入るもののすべてが言葉の書かれた紙テープのよじれ合いだっ

た。数えきれないほどの言葉たち。

言葉はいったいいくつあるんだ、と彼は思った。そんなふうに考えてみただけで、手も足も出ない無限大の壁にぶつかったような気がした。

言葉がおれを渦の底に引きずり込もうとしているのだ、と思った。そして言葉の海にのみ込まれた時、おれは死ぬ。

そう思って体をビクリと縮めた時、顔のすぐ近くにある紙テープに書かれていた文字をふいに読むことができた。その文字の並びが脳の言語中枢に飛び込んできたような具合だった。

「しからずんば」と文字は並んでいた。言葉だ。確かにこれは言葉だ。

だが、「しからずんば」とは何なのだ。そのように文字が並んで、おれにいかなる意味を伝えるのか。

彼は夢の中の本能で、電撃的に察知した。

「しからずんば」がわかるならばおれは助かる。だがわからないのなら、死ぬのだ。

それがこの言葉の渦のルールだ。

「しからずんば」って何だ。漢字でならどう書けるのだ。彼はその漢字を常ならば知っているのに、今はどうしても思い浮かばないと気がついた。そんな奇体なものが漢

字で書けるはずはない、という気がした。おれは「しからずんば」に殺されるのか、と思った。すると、紙テープに書いてあった「しからずんば」が、拡大されて宙に浮かんだ。

さあ答えろ、とばかりに目の前に大きく「しからずんば」があった。

「叱らずんば」という漢字が頭に浮かびあがり、駄目だそんな考えでは助からない、と絶望した。そんなものではないのだ「しからずんば」はもっと権威的な容赦を知らぬ何かであり答えられぬ者を八つ裂きにしてでも殺すであろうああ死にたくない。

恐れが最大限に達した。言葉はついにおれを殺すのだ、復讐されるのだ、とうとうその時が来たのだ、と思った。

そこで、全身をビクンと縮めて彼は目を覚ました。恐怖のあまりもう夢の中にいることができなくなり、そこから叩き出されたような感じだった。

彼は上体を起こしてベッドの上にすわり、しばらく夢のもたらした恐怖の続きの中にいた。

おれは「しからずんば」に殺されるのか、と思ったらいきなり、漢字がわかった。

「然らずんば」に決まっているではないかと。

そして夢の中の恐怖は急速に薄れていった。

そしてだんだん彼は、言葉の渦というイメージを楽しみだした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com